

メッセージアウトライン マタイの福音書6：1～4 「報いを受けない施し」

[1]「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません」

ここから山上の説教の新しい区分に入る。この1節の言葉は次に続く2節から18節の内容をひとことで表していると言ってもよい。この言葉は私たちがよい行いをする時、それを見せたり誇ったりしてはならないと教えている。そうしないと私たちの天の父(神)から報いが受けられないと言う。

1節から18節までを大きく分けると三つになる。①私たちの施しの態度(1-4) ②祈りの生活と神との交わりのありかた(5-15) ③断食について(16-18)

クリスチャンは他の人がその生活を見て、神をあがめるような生き方をすることが大切。しかし、同時に、人々の注意を自分自身に引きつけようとして物事をすべきではない。この1-4節では特にそのことを学びたい。

一般的に人は物事を行うときに極端になってしまうことがある。自分のやっていることをこれ見よがしに自慢し、自信過剰になるか。あるいは自分に自信を持てず、ひたすら自己に閉じこもり、周りの顔色をうかがう者になるか。私たちはこの両方を行ったり来たりしてしまうことがあるのではないだろうか。私たちは5:13-16で教えられたように、地の塩、世の光としての役割を果たしていく必要がある。しかし、それでは人前で善行をすることになるのではないかと言われるかもしれない。しかし、実際はこれらは矛盾しない。使徒2:41-47を見ると、あの五旬節の聖霊降臨の日以降多くの人々が救われ、信仰を持ち、教会が成長しつつあった。その初代教会のクリスチャンたちは教会誕生のごく初期にはお互いに財産を持ち寄って共有し、それぞれの必要に応じて分配し、心をつなげて礼拝を守っていた。ここではひっそりとではなく、堂々と人々の前で物を共有し財産や持ち物を売って必要なことのために使っていた。また使徒パウロは諸教会に呼びかけて、エルサレムの貧しいクリスチャンへの献金を公然と募金した。→ I コリント16:1-3

このような例から教えられることは人前でする、しないというような形式は問題ではないということが分かってくる。では何が問題なのか。次の2節を見よう。

[2]「ですから、施しをするとき、偽善者たちが人にほめてもらおうと会堂や通りで

するように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです」

この「施し」とは言うまでもなく、人々を助けることであり、必要な時に援助の手を差し伸べ、お金や時間、労力、その他何でも人々の助けになるものを与えることである。しかし、ここでは誤った施しの仕方が言われている。それは自分の前でラッパを吹くような施し方、偽善者のような施し方であるという。これは実際にラッパを吹くということではないが、自分のやっていることを言いふらし、それに人々の注意を引きつけようとすることであり、それによって人々の関心を買ひ、またほめたたえられることを願うことである。そして実際にその行為によって周りの人が彼らをほめたたえるなら、彼らはすでに自分の報いを受けているというのである。天の御国ではなく、この地上ですでに受け取っているというのである。アナニアとサツピラの夫婦は人々から賞賛されることを願ってある行為をしたが、その結果は恐るべきものとなってしまった。→使徒5:1-11

私たちは目先の名声や評判を目当てにこれ見よがしにラッパを吹いてはならない。

しかし、この施しについてある人々はこの世の人々からの報いを求めないのはもちろん、神からの報いも求めてはならないと主張する。つまりクリスチャンの生活はそれ自体が意味があり、天国での望みとか、神からの報いとかいうものを当てにしてはならない。どのような報いも望まず、ただただ私心をなくし施しや奉仕に専念すべきであると言う。これは一見立派な意見のように聞こえるが実は正しい考えではない。

使徒パウロはピリピ3:13-14で次のように言っている。「兄弟たち。私はすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです」

またヘブル人への手紙11:24-26には次のように書かれている。「信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした」

また聖書全体から見ても、信仰者は決して朽ちることのない天の都を待ち望み、

報いが与えられることを願っている者であることに間違いはない。クリスチャンは地上の人生を終えて、それで死んで葬られて無になってしまうのではない。私たちは決して朽ちることのない新しい体をいただいて、永遠の天の都に入り、豊かな報いをいただくことができるのである。

ただしその報いはこの地上での生き方、行いと関係があることを忘れてはならない。

Ⅱ コリント5:10「私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです」

私たちはやがてこの世にあってした行為、施しといった様々な行いを神の前でさばかれて、それにふさわしい報いを受けることになるのである。→マタイ25:31-46

イエス・キリストを救い主と信じている者は滅びに行くことはない。ただそれぞれ報いが違うのである。

[3-4]「あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見えおられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」

これは自分のしている施し、良い行いを他人に言いふらさないことはもちろん、そのようにしている自分自身を誇らないことである。→ルカ18:10-14(パリサイ人と取税人の祈り) 私たちはこのパリサイ人のようになってはいけません。

私たちはこれをした、あれをした。だから神様から豊かな報いをいただけるだろうなどと心の中で損得勘定をしてはならない。自分のした施しは右の手が左の手に知らせないがごとく、意識しないこと、忘れてしまうことである。その代わり「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして主なる神を愛することと、自分の隣人を自分自身のように愛する」ことに励むのである。→マタイ22:37-39

そのために、私たちは私たちの罪のために十字架にかかって死んでくださったイエス・キリストを見つめ、その生涯とキリストが私たちのために忍び、苦しんでくださったすべてのこと、主が私たちのために何をしてくださったかを深く思うことが大切。またそれらのことをよく知るために、私たちは毎日、神のみことばである聖書を読むことが必要である。そのために費やす時間は決して無駄にはならない。

私たちのなすすべての施し、すべての行いは神が覚えていてくださる。神が知らなかった、忘れていたなどということはない。神は隠れたところで見えてくださる

のである。

また私たちが施しや献げ物ができるのは健康や環境が与えられて、働くことができる神の恵みであり、神がそれらを私たちに委ね、与えてくださったからであることも忘れてはならない。

→ I 歴代誌29:9~19 神殿建設のためのダビデの祈り

(14)「このように自ら進んで献げる力を持っているとしても、私は何者なのでしょう、私の民は何者なのでしょう。すべてはあなたから出たのであり、私たちは御手から出たものをあなたに献げたにすぎません」

(18)「私たちの父祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。御民が心にめぐらす思いをとこしえに守り、彼らの心をしっかりとあなたに向けさせてください」

私たちが地の塩、世の光として生き、何事も神の栄光を表すために生きようとするなら、やがて私たちが神のためにしたことを、神は一つも漏らさずにご存じであったということに気がつくときが来るであろう。→マタイ25:34「さあ、私の父に祝福された人たち。世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい」

箴言11:24「気前良く施して、なお富む人があり、正当な支払いを惜しんで、かえって乏しくなる者がある」